

タイトル	カナダ・アルバータ州先住民遺跡観光の現状
著者	大森, 一輝; OMORI, Kazuteru
引用	北海学園大学人文論集(67): 13-22
発行日	2019-08-31

【各論1】

カナダ・アルバータ州先住民遺跡観光の現状

大 森 一 輝

今も言いましたように、カナダ・アルバータ州の先住民遺跡観光ということで、9月に調査をしてきました。

どこに行ったかということなのですが、主に2か所を訪ねました。

1つ目は、Head-Smashed-In Buffalo Jump というところで、バッファロー狩りの断崖ということなのですが、世界遺産登録をされているカナダの先住民文化を示す遺跡が2つあるうちの1つということになります。

もう1つは、ブリティッシュコロンビア、一番西側の州の西部の海岸沿い、アンソニー島にある、ハイダという民族の遺跡です。

わかりやすいのはトーテムポールなのですが、10メートル以上のトーテムポールが30本以上立っているという場所です。

しかしながら、そこは現在は無人島になってしまっていて、19世紀にヨーロッパ人が持ち込んだ伝染病で地域住民がみんな死んでしまったという島なので、現地にその文化を受け継ぐ人たちがいません。

ですから、カナダで先住民文化が世界遺産に認定された2つのうち、その地域にまだその文化を受け継ぐ人たちがいて、それを伝える活動をしている場所ということで、このHead-Smashed-In Buffalo Jump (以下、HSIBJ)を選びました。

それから2つ目は、その付近にあるBlackfoot Crossing Historical Park (以下、BCHP) というところです。

こちらはボウ川という川、カルガリー市内を流れているのですが、その川沿いの集落の跡で、カナダ政府との条約、1877年の第7条約(順番に結んだのでナンバーが振られています)の締結の地が歴史公園になってい

るところです。条約の中身は、基本的には土地をカナダ政府が獲得をする、そのかわりに先住民に対して一定の保護を与えるというもので、それについては、もちろん立場によっていろいろな解釈があります。

場所を確認したいと思います。赤いところがアルバータ州ということになります。アルバータ州南部、黒く囲ったところなのですが、ここが調査対象地域です。ここを拡大します。そうすると、上のほうにアルバータ南部の中心都市であるカルガリーがあります。

HSIBJは、ここから南に180キロぐらい行ったところになります。車で2時間ちょっとぐらいでしょうか。それから、BCHPというのは、カルガリーから南東に100キロぐらい行ったところですが、車で1時間半弱かかります。位置関係はこのようになります。ついでに言うと、本学が36年ほど協定を結んでいるレスブリッジ大学のあるレスブリッジは、HSIBJの西、BCHPの南ということになります。今回はレスブリッジ大学にも行って、先住民研究学部の先生とも話をさせていただきました。

いずれも都市部からかなり離れた辺鄙なところにある、そういう遺跡です。

まずはHSIBJについてご説明します。

これが、崖なのですが、崖の端のほうになだらかな丘のようになっているところがあって、その丘の斜面の中に埋め込むような形で博物館（インタープリティブセンターと言います）が建っています。全体で7階建てぐらいで、博物館の展示のフロアとしては5フロアあります。

ここで、一番上まで行って、右手に出ると、崖が広がっています。そこからバッファローを追いついて、それで下で仕留めて処理をした、そういう場所になります。

ここは、年代についてはいろいろと説があるようですが、少なくとも5,500年前ぐらいからは、狩りが行われていたであろうと言われているようです。

可能性としてはもっと前から、この地域で人が暮らし始めたのは1万年前ぐらいのようですから、その頃からのバッファロー狩りの痕跡というの

を大規模な形でほぼ手つかずのまま残している、そういう遺跡だと言われている。

崖下では、バッファローの骨とか、あるいは矢じりとかを含めたさまざまな道具類が10メートルぐらいの深さまで埋まっているところもあって、それぞれ年代が違ってきますから、何千年間かのバッファロー狩りの変化を考古学的に検証できるという貴重な場所です。

そういう意味で、世界遺産の認定基準で言えば第6番目ということになるのですが、「顕著で普遍的な意義を有する出来事、現存する伝統・思想・信仰または芸術的文学的作品と直接にまたは明白に関連するもの」ということで、こういう何千年にも及ぶバッファロー狩りの文化といったものを非常にはっきりとした形で残している、示している、そういうものとして世界遺産に認定されたということになります。

ですから、認定されたときには、考古学的な価値がメインというか、それが認定の理由で、これも先のところで少し言いますが、先住民の文化であることとか、あるいは彼らの文化が継承されているというような、そうしたことが世界遺産認定の理由になったわけではありません。

その認定にも、先住民は全く関わっていません。1981年に認定されたのですが、それを推進したのはカナダ人、白人の考古学者で、そういう考古学的な理由をアピールして、先住民の与り知らないところで、世界遺産に認定されました。

次に、もう1つの、世界遺産ではないほうのBCHPについてご説明します。

これが、文化センターというか博物館というか、そういったさまざまな機能を兼ね備えた施設の全景の写真になります。裏に回ると、先ほど言ったボウ川になだらかにつながっていくような、そういう場所に作られています。極めて大規模な施設で、いろいろなところに非常に特徴的なデザインが施されているのですが、それぞれシクシカという民族にとってのさまざまな象徴的な意味が込められています（残念ながら、今日は詳しく説明している時間はありません）。

川沿いにこんなふうには土地が広がっていて、実際にここでシクシカの人たちが暮らしていたわけですが、今でも夏だとティピーというテントで宿泊体験のようなことをさせてくれます。

実際、ちょっと離れたところに行きますと、この川沿いにはまだ先住民のリザーブ(居留地)がありました。そこで、シクシカの人たちが暮らしています。

先ほども言いましたように、カナダ政府との条約の締結の場所で、そこには記念碑が建っているのですが、実は、この記念碑、破壊されています。看板が壊され、銘板が剥ぎ取られているわけです。

誰がやったのかはわかりませんが、カナダ政府との条約に関して先住民の人たちが持っているいろいろな思いが、こういう形で示されているのだろうと思います。

それで、基本的にこの2つが今どういう状態になっているのかということについて、簡単に比較してみました。

まず、HSIBJですが、山の中に作ったインタープリティブセンターが開設されたのは1987年です。世界遺産の認定は、先ほども言いましたが1981年のことになります。

世界遺産認定に関しては、先住民の人たちは関知していないという格好なのですが、あのセンターを作るにあたっては、先住民の人たちと協議をして、なるべく彼らの文化を正確に紹介するような、そういうセンターを作ろうとし、実際にそうしたとされています。

87年の開設のときには、アンドリュー王子(イギリス女王の次男)夫妻が来て記念式典に参加したそうです。世界遺産ですから、カナダという国家が責任をもって管理しなければならないので、設置運営主体はアルバータ州政府で、実際に管理しているのもアルバータ州政府ということになります。運営資金なのですが、3分の1は入場料で賄っていて、残り3分の2は州政府で出しているという説明でした。

しかし、現地に行って展示・解説部門の責任者の方と話をさせていただいたのですが、彼の言うところだと、政府はそんなに金は出していない、

金を出さないのに口ばかり出すと、非常に不満を口にしていました。

年間来場者数は6万人程度というところのようですが、これも年によってはもっと多いときもあるようで、大体6万から8万ぐらいで推移しているようです。

どんな人が来るかという、州内からが半数で、残りの4割が近隣、つまりカナダの残りのところと、それからアメリカからやって来る。ヨーロッパからが1割ぐらいということになっているとのことでした。何のために来るのかということなのですが、世界遺産を見に来る、バッファロー狩りの歴史を学ぶ、ということのようです。

展示については、次のBCHPのところでも言いますが、こちらの展示は、かつて行われていたバッファロー狩りの歴史というか、あるいはそれに関連したBlackfootの人たちの暮らしぶりというのを伝えるということになっていて、基本的にはそれだけが中心で、先住民がヨーロッパからの侵入者ないし後のカナダ政府等との関係の中でどういう歴史をたどってきたのかというような、社会的な問題についての展示はあまり手厚くないという印象を受けました。

それから、それでもスタッフはほとんどが先住民でした。特にガイドはみんな先住民で、自分たちの文化を伝えているということです。

世界遺産であることは、この施設を運営していくにあたって非常に役立っている、世界遺産だからこそ来てくれるという人がほとんどであるということでした。

それに対して、BCHPなのですが、こちらは大分新しく、開設されたのは2007年ということになります。

先ほど来お話をしている第7条約、この地域の先住民が土地を明け渡して政府の庇護下に入ったという条約ですが、それが1877年に締結で、その100周年の記念行事というのがあったようで、そこにはチャールズ皇太子が来たようですが、それを1つのきっかけとして、先住民自身がその土地を歴史公園にするということを企画し、20年以上かけてようやく2007年に開設したという、そういう施設です。

先住民自身が作って運営しているものということで、設置運営主体はシクシカという民族政府になります。ですから、お金もそこから出ているということです。

来場者数なのですが、データをくれと言ったら、開設からちょうど10年ぐらい経ちますが、10年間で25万人ぐらいだという大変大雑把な数字を示されました。1年で割ると25,000人ということになるのですが、かなり怪しいと思います。

私が行ったときには午前中ずっといたのですが、入場者は私1人でした。他には誰も来なかったので、そこから推測すると、おそらく、25,000人にはならないのではないかと思います。

どういう人が来るのか聞いてみたところ、地元の年配の方とか、あるいは子どもたちが学校の社会科見学のような形で連れてこられるというパターンが多いという話でした。他にも、ヨーロッパなどからも観光客が来るということでした。

何をしに来るかという、先住民の歴史を学ぶために来るそうです。年配の人たちなどは、学校教育の中で先住民の歴史を学んでこなかったもので、ここに来てそれを学んでショックを受ける人もいるし、子どもたちは子どもたちで大変しっかり学んでくれていると言っていました。

スタッフは、全員がシクシカの人たちです。

世界遺産になることも検討しているそうですが、あまり積極的ではないような印象を受けました。

それぞれの施設の現状と課題ですが、HSIBJのほうは崖自体には手を加えられないので、それに付随する施設で工夫をしています。たいいていの人が一生涯に一度しか来ないので、あまり奇を衒ったイベントをするのではなくて、オーソドックスに先住民の暮らしを伝えるような展示をしている、観光客相手に歌や太鼓や踊りを実演したり自分たちについて語ることが、文化の継承に役立っているのだと言っていました。

しかしながら、これは話を聞いてびっくりして、思わず「えっ、本当なのですか?!」と言ってしまったのですが、行政側はこの施設を先住民の

文化センターであるとは考えていないということでした。

観光客用とは言いませんが、あくまでも世界遺産を保護し、それを伝えていく、そのためのものであって先住民のための施設ではないという位置付けなのだそうです。

課題としては、大分古くなってしまったので、なおかつ、こんなに観光客が来るということを想定していなくて、特に夏は人が大勢来てさばききれないので、拡張したいが、州政府が官僚的すぎて、やりたいこともできないと言っていました。

BCHPのほうは、あまり観光のほうにシフトしていない施設で、博物館では大変興味深い展示がなされていたのですが、（私の知っている限り、北米の博物館としては珍しく）写真を撮らせてくれません。というのは、自分たちが大切にしてきたものを見てもらいたいのだけけれども、パシャパシャ写真を撮って帰っていくというような、そういう態度では困る、と考えていて、適切な距離感というか、敬意というか、そういうものを求めています。

それだけではなくて、むしろ観光客相手というよりは自分たち用に、特に若い世代のための歴史や文化や言語のクラスといったものにも力を入れていて、それを観光と両立させようとしているのですが、問題はお金がないということです。

だからこそHSIBJと同じように州政府の傘下に入って、それで政府によって維持してもらおうというようなことも考えたそうですが、それだとやりたいことができなくなるということで、一度は断念した。

でも、世界遺産になるかならないかということについては、まだ考えている。なるべく自主性を手放さないで、どうしたら世界遺産になれるのかなれないのかを思案しているということのようです。

あとは、世界中のいろんな博物館に持ち去られてしまっている自分たちの文化的な遺品を取り戻したいと思っているのだけれども返してもらえない、ということも課題として挙げていました。

お前たちのところではきちんと保存できないだろう、貧弱な施設では展

示もろくにできないだろうから返してやらない、俺たちが持っているほうがいいのだとヨーロッパの博物館に言われるそうで、盗人猛々しいとはこのことですが、彼ら自身も自分たちにはお金もないし設備も不十分だから仕方がないところもあると半ば諦め気味でした。いろいろな意味で、十分な展示もなかなか思うようにならないというのが実情です。

2つを比較します。順番を逆にして、BCHPのほうから先に言うと、こちらは今も言いましたように文化継承活動というのに重点を置いているので、観光収入が乏しく、全然お金がないという状況です。それに対してHSIBJのほうは、観光にシフトしているのでお金は入ってくる、ないしは、州政府がついているのでお金はある。それから、やはり世界遺産なので圧倒的に認知度が高いという状況です。

結局のところ、BCHPは自分たちのための活動を重視していて、それで自主運営をしているがためにお金がなくてやりたいことができないし、みんなにも知ってもらえない、それに対して、HSIBJのほうは、来てくれる人たちのための活動を重視していて、政府の資金で運営していて、観光客は来てくれてお金も落としてくれるけれども、でもそれによってやることに偏りがでてしまっている、というように対比できると思います。

これを、全体としてどう考えたらいいのか、ということになります。

この2つは、非常に対照的な施設です。自分たちのための施設であることを守ろうとすればお金が入ってこなくて大したことができない。人が来てくれるための施設にしてしまうとお金はあるけれどもやりたいことができない。

これを、何とかつなげないか、ということを考えています。

BCHPのほうは、シクシカという民族の人たちが、自分たちの施設である、今に生きる文化というのを継承するための施設であるというふうと考えて運営しているわけです。

それに対してHSIBJのほうは、こちら、その文化を継承するピカニとかカイナという人たちがいるのですけれども、しかしながら世界遺産になっているので、その人たちを通り越してしまって、世界遺産として、か

つてのバッファロー狩りの時代の暮らしぶりを観光客に見てもらおう、そういう施設になってしまっているわけです。

それをつなぐためのヒントとして考えたのが、ここにも行ってきたのですが、カルガリーにあるグレンポー・ミュージアムという博物館です。

ここには、先住民のセクションもあるのですが、その展示は Blackfoot の人たち自身が監修をして、それで非常に正確な形で自分たちの文化や歴史を伝えているのだということをレスブリッジ大学の先生から聞いてきました。

この博物館では、先住民展示のところだけではなく、アルバータの歴史とかカナダの歴史のところにも、必ず「先住民の視点」という解説を入れています。

例えば鉄道を引くというのは、カナダの発展という歴史の中では素晴らしいことなのだけれども、でもそれは先住民の目から見るとどうだったのか、というようなことを、それぞれの展示の中に織り込み、いろいろな視点でそれを考えさせるような、そういう仕掛けがされていました。

シクシカとかピカニとかカイナという人たちは、それぞれ独自のグループを形成しているのですが、しかしながらより大きなカテゴリーとしては、Blackfoot という、共通の言語文化を持つ民族です。

ですから、HSIBJ を単体の世界遺産と考えるのではなくて、むしろ BCHP のようなものと合わせて、Blackfoot 全体の遺産として捉え直す、そのうえで、それを先ほども言ったようにアルバータというカナダの、現在カナダになっているその地域の中にうまく位置付けて、あるいはカナダの遺産として改めて考え直すというようなことができないだろうか、と考えています。

今のところは、別々の施設としてほぼ没交渉のようです。BCHP では、HSIBJ はうまいことやっているようだけれども、こっちは金がなくて、みたいなことも言っていましたし、逆に、HSIBJ のほうでは、自分たちはなかなかやりたいことができない、みたいなことを言っていたので、それを何とかまとめていくことができないか、その可能性を今後追求してみたい

と思っています。

というのも、世界遺産自体が、最初にも言ったように、人類全体のものであると同時に、地域のものであるという両極の位置付けなので、それをもっと下から積み上げていく、それぞれシクシカの人たち、ピカニ、カイナといった人たちが受け継いでいる文化であり、しかしながらそれがBlackfootという、その地域の先住民の文化であり、それを含めたアルバータという地域の文化遺産であり、なおかつそれをカナダが守っていて、それを世界に発信しているというような、その地域の人たちの重層的な構造の中にうまいこと世界遺産として位置付け直す、そのときには一番下の部分の先住民自身が、当たり前のことですけれども、意思決定に関わるような、そういう仕組みをうまくつくっていったって、HSIBJだけが観光地として発展するのではないような、そういう絵を描けないだろうかというふうに、今のところ漠然と考えています。

私の報告は以上です。